

The Bridge of Dreams

夢の浮橋

『源氏物語』の詩学

ハルオ・シラネ

鈴木登美 北村結花 訳



The Bridge of Dreams

夢の浮橋

『源氏物語』の詩学

ハルオ・シラネ

THE BRIDGE OF DREAMS:
A POETICS OF 'THE TALE OF GENJI'

by Haruo Shirane

Copyright © 1987 by the Board of Trustees of the Leland
Stanford Junior University. All rights reserved.

Translated and published by arrangement with
Stanford University Press.

Japanese edition © 1992 by Chuokoron-Sha, Inc.

夢の浮橋 『源氏物語』の詩学

© 1992 検印廃止

1992年2月15日初版印刷

1992年2月25日初版発行

著 者 ハルオ・シラネ

訳 者 鈴木登美 北村結花

発行者 嶋 中 鵬 二

印刷所 精 興 社

製本所 大 口 製 本

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋2-8-7

振替 東京2-34

Printed in Japan

ISBN4-12-002088-6

夢の浮橋——『源氏物語』の詩学 目次

序

I 権力の美学

第一章 王権と侵犯

貴種流離 王権 黄金時代 源氏 侵犯と再生

24

第二章 流離の詩学

43

第三章 花咲く運命

51

道長の影 六条院 へみやびとへもののあは
れ 真昼の闇

II 秘められた花

第四章 恋愛、結婚、ヘロマンス——若紫

74

帝の夫人たち 在原業平 異例な結婚 三つの

品　ロマンティックな転生

第五章　物語の形態、対位法、ボリフォニイ社会的周縁——帚木系の巻

増殖する物語　テクスト成立論　社会的身分の

差異——空蟬　自然と身分——夕顔　喜劇的対

位法——末摘花、源典侍　傷つくヒーロー

第六章　歴史、神話、女性の文学——明石の君

受領　神話の残響　冬の御方　女性の著作

第七章　擬似近親相姦——玉鬘十帖

意地悪な継母とエロティックな継母　抗う継娘

擬似娘たち　不如意の父親　継息子

III　抒情的悲劇

第八章　一夫多妻の三角形

ヒロインの解体　異質な声——六条御息所

ヴァリエーション
変奏——夕霧をめぐる物語

第九章 抒情と哀傷

抒情的モード 死における美 四季

第十章 類似的關係——落魄の姫君たち

落魄の姫君たち 大君〈女房〉と選択の自由
中君と正統的な結婚

第十一章 反復と差異——浮舟

不遇な継娘 形代・ゆかり さすらい 再生
ヒーローの消滅

IV 精神的探究と求道

第十二章 宿世——源氏

御仏の光 罪と応報 愛執

第十三章 心の闇——八の宮、薫、浮舟

265

心の闇 夢の浮橋 仏教のパラダイム 誘惑

付録A 『源氏物語』の主要登場人物

293

付録B 『源氏物語』の作者およびテキストについての覚書き

308

註 321

主要参考文献

355

訳者あとがき

377

夢の浮橋——『源氏物語』の詩学

序

中世初期のヨーロッパでは、「ロマンス」(romance)という言葉は、公用学術言語であるラテン語に対して、ラテン語から派生した新しい地方語をさしていた。Enromancier' romanzgar' roman' romanz は、書物を地方語で書いたり翻訳したりすることを意味し、そのような書物は roman' roman' romance' romanzo と呼ばれた。⁽¹⁾ 平安時代(七九四～一一八五年)、「物語」という言葉は、とりとめのない雑談、あるいは、公用学術言語の古典中国語(漢文)ではなく日常語で書かれた散文のフィクションを意味した。⁽²⁾ 今日、平安文学の代表作と言うと、我々は『源氏物語』と『枕草子』(九九六年)を思い浮かべるが、平安貴族がもっとも高く評価した文学は、和文で書かれた散文ではなく、専ら男性が用いた書き言葉の古典中国語による詩や散文、及び、男女の別なく詠まれた日本固有の詩、つまり和歌であった。⁽³⁾ 『続本朝往生伝』(一一〇三年)の冒頭の章で、平安時代の高名な学者、大江匡房(一〇四一～一二二一年)は、一条天皇時代(在位九八六～一〇二一年)における八十六人の著名人を掲げ、それを二十のカテゴリーに分けている。その中には和歌、音

楽、絵画、医学、法律、儒学といった分野が含まれているが、和文による散文——物語、隨筆、歌日記——の分野は一つもなく、今日もっとも知られている二人の平安女性作家、紫式部と清少納言の名も見あたらない。名前が掲げられた女性には和泉式部と赤染衛門だけであるが、ともに歌人として名声を博していたのである。

和歌は平安時代初期に一時衰退するものの、十世紀の初めには高度に洗練された一流の文学形式として再び盛んになっている。複雑な歌論が発達し、最初の勅撰和歌集である『古今和歌集』（九〇五年頃）が編纂された。歌を詠み、披露し、鑑賞する際の精緻な規則も整えられていた。これとは対照的に、和文による散文作品は、九世紀後半に仮名文字が完成するのを待ってようやく現れてくる。厳密に形式が規定された和歌とは異なり、物語はその構成、内容共に未だ定まっておらず、新たな物語が出現するたびに新たな形式や内容が生み出されていく、雑多な混合形態であった。また、フィクションについての何らかの理論あるいは「道」といったものは存在しておらず、「物語」に関する最初のまとまった批評書である『無名草子』（一二〇〇年頃）が書かれるのは、あと二世紀を経たことであつた。⁽⁴⁾

紫式部の時代には、散文作品は、主として伝記や歴史書や宗教論書のみが価値を認められていた。それらは通常、漢文で書かれ、また、儒教の伝統に従って実用的で教訓的な目的にかなうものであった。これに対して、和文で書かれた散文のフィクションは、政治や宗教上の公的言語である漢文を読めない婦女子向けの取るに足らない娯楽とみなされていた。学者は漢文による散文文学や和歌には名を記したが、物語に署名しはしなかった。初期の物語で現存する三つの作品——『竹取物語』、『落窪物語』、『宇津保物語』——は言い伝えでは、男性の学者、源順^{しげのり}（九八三

年没)の作とされているが、彼の一番弟子である源為憲(一〇一一年没)でさえ、物語について「女のもてあそびもの」と見下すように言っている⁽⁶⁾。

当時の支配的なイデオロギーであった仏教は、物語りをすることを寓話、つまり、無学な人々に高度な真理を伝えるための方便として認めてはいたが、散文のフィクションに対しては、儒教がそうしたように、不信の念を抱いていた。物語は読者をだまし、事実をゆがめ、不道徳な行いを奨励する狂言綺語であると非難された⁽⁷⁾。時代が下って室町時代や江戸時代の注釈者になると、もっと教訓的な見方をし、業の報い、人生の無常、愛執の恐ろしさといった仏教の原理を描いているとして『源氏物語』を評価しているが、紫式部と同時代の仏教側の姿勢は、僧澄憲の『源氏一品経』(一二七六年)にもっとも明確にあらわれている⁽⁸⁾。この書で澄憲は、恋愛について書き過ぎたために紫式部は地獄で苦しんでいると断言している。同じような調子で『宝物集』(一二七九年)は、『源氏物語』の著者は数々の「そらごと」を語った咎で地獄行きを宣告されたと読者に伝えている⁽⁹⁾。

鎌倉時代初期によく、『源氏物語』は第一級の文学として認められたが、物語それ自体ではなく、作品中の和歌や詩的章句が評価されたのである。『源氏物語』は歌人の参考資料、つまり、歌語や態度姿勢やテーマの手引き書となったのである⁽¹⁰⁾。『源氏物語』が世に出てしばらくすると、歌人たちは『源氏物語』を本歌取りの典拠として使い始めている。鎌倉時代の初頭には、高名な歌人藤原俊成(一二一四～一二〇四年)が、六百番歌合(一二九四年頃)の有名な判詞で、「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事なり」と述べるに至る⁽¹¹⁾。俊成の偉大な後継者である藤原定家(一二六二～一二四一年)は、『源氏物語』の短い注釈書を書いているが、和歌を詠んだり鑑賞したりするには欠か

せない平安美学や詩的感性を知るのにこのうえない手本として、『源氏物語』をとらえている。⁽¹³⁾

時代の経過と平安宮廷社会の消滅に伴って、『源氏物語』に出てくる言葉や宮廷のしきたりの意味が曖昧になってきたので、これらを説明するために初期の注釈書が登場してくる。しかし俊成や定家の影響を受けた鎌倉時代の注釈者たちは、『源氏物語』にあらわれる和歌とその出典、さらに、儀式、出来事、登場人物といったものの歴史上の典拠に特に関心を寄せた。⁽¹⁴⁾室町時代には『源氏物語』は連歌に親しむ人々の必読書となる。これは、室町以前、和歌を作る際に『源氏物語』が必要とされたのと同じである。連歌を作ったり鑑賞したりするためには、『源氏物語』に見られる言葉遣いや作品世界に関する詳しい知識が要求されたのであり、室町時代の後半に出現した数多くの『源氏物語』注釈書は、そうした連歌の実践の直接の成果である。⁽¹⁵⁾現代の『源氏物語』研究はこれら中世の注釈書の恩恵を受けるところが大きい。これら中世の学者・歌人たちは、テキストを校訂し、保存したばかりでなく、後世の読者が多くの不明瞭な箇所を理解し、『源氏物語』と和歌や中国文学や歴史との関係をより明確に把握することを可能としたのである。

『源氏物語』は驚異的な量の文学や宗教のテキスト(『史記』、『文選』、『白氏文集』をはじめとした中国文学、広範囲に及ぶ仏教經典、数多くの歌集からの和歌、様々な物語、日記、歌謡、歌合、歴史書)に言及し、それらを引用したりふまえたりしている。⁽¹⁶⁾物語の文学的地位の低さを十分知っていた紫式部は、和歌や漢詩や年代記といった貴族社会で高く評価されていた文学形式を広く活用している。『源氏物語』以前の物語にも和歌の引用は見られるが、それらはいずれも、平安時代の日常生活で行われていたように、会話や詠み交わされる和歌の中で生じたものとしてあらわれており、『源氏物語』のように地の文で引用されることはなかった。『源氏物語』における和歌

の引用箇所の大半は、もとの歌の語句のほんの一部を引いているにすぎないが、中世の注釈書が明らかにしたように、その多くがもとの歌のイメージや場面設定や雰囲気や敷衍している。その結果、『源氏物語』は他に例を見ないような豊潤で密度の濃い作品となっているが、それと同時に、全く相反する解釈や議論の余地も生じている。かくも現実味のある人間世界を浮かび上がらせている作品を鑑賞するには文化的背景に関する知識が少しあればそれで十分とみえるかもしれないが、『源氏物語』を読む場合には、中世の和歌の場合と同じように、詩歌の規範に関する知識が必要であり、また、広範な先行作品に関連させて理解する必要がある。

以下、本書は『源氏物語』（以降『源氏』とも略す）を四つの系の相互テクスチュアルな関係に照らしつつ分析する。すなわち、『源氏』と（和歌を中心とする）詩的伝統との関係、『源氏』と先行する物語群との関係、『源氏』とその直接的な歴史的コンテキストとの関係、そして最も重要なものとして、『源氏』自身におけるさまざまな部分間の関係——これら四つの系を中心に、多様なテキストの響き合う物語空間としての『源氏物語』を分析していく。本書において『源氏』は、その同時代の読者の共通知識として作者が陰に陽に前提としていた先行作品や通念、文学的慣用、定型などの面からも光をあてられる。筆者は、『源氏』を適宜、ハンス・ロベルト・ヤウスの言う「期待の地平」、すなわち、作品の受容に暗黙の了解となっていた約束ごと（コード）や解釈上の前提のコンテキストの中に据えて見た。こうしたアプローチによって、作品を単に作者の思想のあらわれ、あるいは「時代精神」の反映とみなすような姿勢を避け、また、現代の読者が自らの現代的な文学観や美意識によってそれと異質のテキストをも無前提に強引に同化させて語り直してしまう、といった傾向をもできるかぎり避けようとした。

有名な「蚩」巻の一節、しばしば紫式部の「物語論」と呼ばれ、『古今集』仮名序にみられる和歌の理論を強く想い起こさせる一節において、光源氏は、物語というものは後世に自らの経験を伝えたいと望む作者の抑えがたい気持ちから生まれるものだ⁽¹⁸⁾と述べる。しかしながら、紫式部は、単に自らの感情表現の衝動に身をまかせたわけではなく、また、自らの周囲の出来事を忠実に記録したわけでもないのである。あるいはまた、式部は、恋、死、離別などを、それに関心があったという理由のみから描いたのではなかった。『源氏』の作者は、文学にふさわしいと見なされていた然るべき主題、修辭、形式を律していた（和歌、漢詩文を中心とした）当時の文学的規範、体系の内側に自覺的に身を置きながら『源氏』を制作したのである。先行する物語作品も、『源氏』と同じように恋に焦点をあてていた。ただ、『源氏』のように、〈哀傷〉や〈離別〉——それぞれ『古今集』の別個の巻の主題をなしている——をも同時に包み込むような先行物語はほとんどなかった。『源氏』には七九五首あまりの和歌が含まれており、その多くは、物語のクライマックスあるいは重要な箇所⁽¹⁹⁾に位置している。さらに、物語の地の文自体の中にも、『古今集』をはじめとする和歌の伝統に由来する比喩や表現が一貫して使われているのである。

紫式部の創造的才能は、『源氏』が先行する物語の定型を突き崩し変形させているありようにも、また明らかである。中世の注釈書は『源氏』と和歌の伝統との関係を追究したが、『源氏』と物語の伝統との関係にはほとんど光をあてなかった。たとえば、紫式部の時代に盛んだったプロットの型の一つに、意地悪な継母の話がある。ヒロインは、継母にいじめられ、困難な試練や流浪に耐えて神的なあるいは超自然的な力に助けられ、そしてついには幸せをもたらす男性とめでたく結婚する、というプロットの型である。『源氏』においては、この単純な話型に則りながら、